巻　頭　言

昭和32年を顧みて

副会長　平　世　将　一

昭和32年もいくばくもなく暮れようとしている．顧みて鉄鋼業界にはまことに多端な一年であつた．幸にしてわが日本鉄鋼協会は業界の変動に煩われさることなく，極めて平穏堅実裡に過ぎ得たことは，まことに御同慶に堪えない．

協会本年の業績を顧みて，例年に比して特にきわだつたものはないが，その運営に意を用いたものとして次の二つを挙げることが出来よう．

(1)　鉄鋼に関する知識，技術の普及，滲透

(2)　原子力に関する調査，研究

(1) については先ず会誌の編集に弾力性を持たせ，従来の技術論文の外に技術資料，抄録等を増し，また講義及び鉄鋼技術共同研究会の成果発表等を加え，頁数を増すと共に内容の多彩充実をはかつた．

更に6月には東京都工業奨励館においてて「鉄鋼の使い方」講習会を開催し，また「鉄鋼技術講座」の刊行を企画し，その編集に着手した．

一方3月27日には American Bridge Division の S. Arnold 氏による「米国における電気炉50年の歩み」と題する講演会を東京都工業倶楽部において開催し，更に11月16日には東京都立産業会館において元 U.S.S. 社技師 N. Hays 氏の「鉄鋼業における熱管理技術について」なる講演会を行ない，広く海外技術の紹介につとめた．

鉄鋼技術の普及滲透については，鉄鋼業界と深い技術的つながりを持つ本会としては従来も力を入れてきた所であるが，本年は更に幅を拡げ，新らしい会員層への呼びかけに意を用いた．これによつて鉄鋼技術が更に高度の発展と同時に，現場で働く人々に平易に理解されることを，こい願う次第であつてこれは今後も続けて行くべき仕事である．

(2) の原子力の問題は今後の技術のあり方として，これを調査研究することは当然であつて，7月本会に原子力に関する研究委員会を設置したことは時宜を得たものというべきである．ただ，同種の研究員委会が他にも二三出来ているので，これ等と充分連絡をとり互に無駄のない発展を期待し度いものである．

なお，これは事業ではないが，ここに記して感謝を新にしたいことは，本年は本会に対し多額の基金の寄贈があつたことである．即ち3月には八幡製鉄株式会社より故渡辺前社長記念資金として金一千万円の寄贈があり，また，9月には本会名誉会員石原米太郎氏より鉄鋼研究基金として金一千万円の寄贈があつた．これ等は本会今後の事業活動に対する最も強力な支援であつて，深く感謝の意を表すると共にその適切な運用を期する次第である．

以上は概略に過ぎないが，本年の経過を通覧し，本会はその基礎がますます強固となり運営も一層の堅実，積極を加えたと確信しうることは会員各位と共に喜びに堪えない次第である．

翻つて鉄鋼業界を見るに，今春突如として行われた金融引締措置により，各社とも経営上大なる困難を生じ，その切抜けにはいづれも一方ならぬ苦心が払われて来たと思うのであるが，それにもかかわらず，各社の合理化計画の推進は目覚ましく製銑，製鋼，圧延各部門ともに新設，更新による新鋭設備が続々として完成され本邦鉄鋼界まれに見る盛観を呈した．

これは鉄鋼業としてはまことに喜ぶべきことに違いないが，一方技術面から虚心に眺めると，この盛観の殆んどすべてが外国技術の導入ないしは模倣であつて，わが国技術者が心血を注いで創造したものは一つもない．設備の偉容を喜ぶと共に一脈の空虚を感ぜざるを得ないのはひとり筆者のみではないであろう．

これと思い合わせて感慨の深い技術的出来事が本年二つあつた．一は熔鉱炉100年祭が釜石製鉄所で行われたことで，もう一つはソ聯の人工衛星打上げである．この二つから身にしみて感ずることは技術的情熱と組織の力である．

参考にすべきものに乏しく指導者も無かつた100年前に，あれだけの技術を打ち立てた大島高任翁の努力はまことに驚嘆すべきものであつて，この血のにじむ技術的情熱の尊さを改めて現在に考えて見る必要がある．

ソ聯の人工衛星打上げの偉業については今更喋々を要しない．ただ，これから考えさせられることはこの偉業の基盤となつた組織の力である．

新技術を生み出し，更にこれを工業力に発展させるためには，規模の大小を問わず個人的叡智とこれを重点的に結集する組織の力が欠くことの出来ない条件である．残念なことには現代の日本はこの二つに欠ける所が甚だ多い．即ち技術は国を挙げて模倣に多忙で創意の育成は影がうすく，また，総力結集的組織も概ね微温的で内容の見るべきものはない．

筆者の感ずる一脈の虚しさは，ここから来るのであつて，大島高任翁の技術的情熱と人工衛星的組織力が切望される所以である．

鉄鋼業と緊密なつながりを持ち，しかも鉄鋼技術共同研究会の一翼を担う本会が，思いをここに致し本邦鉄鋼技術の重点を明示し，これに向つて協力態勢を推進することは，まさに本会に課せられた大使命というべきであろう．

昭和32年を送るに当り本会の揺ぎなき発展を喜ぶと共に，いささかの所感を申述べた次第である．